

## 三代世表考：殷周始租を中心として

本城，説治

<https://doi.org/10.15017/2341045>

---

出版情報：史淵. 15, pp.137-165, 1937-03-30. 九州帝国大学法文学部  
バージョン：  
権利関係：



## 三代世表考

——殷周始祖を中心として——

本城説治

### 緒言

史記十表の中、三代世表はその第一に置かれてゐるものである。三代とはいふまでもなく夏殷周のことであり、世表とはその先公及び帝王の世系表のことである。然し三代世表は三代のみならず、その上に便宜上五帝の世系をも附加してゐる。そして周の世系については、たゞ十一世厲王の次の共和までだけを載せてをり、以下は第二の十二諸侯争表の方へ繰入れてゐる。三代世表は右の如き内容について其の大體をとつて名付けたものである。此の小論は、その三代世表の中、主として五帝の部分及び殷周の祖、殊に後者に重きをおいて若干の考察を試みたものである。

### (一)

世表の中、五帝に關する部分は五帝本紀と相表裏する。本紀の方は、主として孔子所傳と稱する宰予問

五帝德及び尙書に據つてをり、世表の方は帝繫と稱するものによつてゐる。<sup>(註)</sup>

(註) 五帝德及び帝繫の二篇は今大戴禮に收められてをり、五帝德は孔子家語にも收められてゐるが、司馬遷編史の當時には片々存在してゐたものである。

所が司馬遷は五帝本紀を作つたことについて、その「太史公曰」にかなり辯解の辭を費してゐるのである。思ふに尙書は堯舜以來を記すのみで、黃帝、帝顓頊、帝嚳の三帝については何ら載するところがない。論語も亦堯舜をいふのみである。今日から見れば、殷代の史料となつてゐる尙書今文の五篇（湯誓、般庚、高宗彤日、西伯戡黎、微子）も到底殷代からの遺文とは認め難いのであり、況んやそれ以前に當る部分即ち虞書、夏書に對しては更に史實性を認め難いのであるが、當時にあつては、否その後實に二千年の開堯舜以來の歴史記述の資料を尙書に求めることについては、何らの疑惑も躊躇も要らなかつた、聖人の刪序に對しては言句を挿むの餘地が無かつたのである。

所が五帝の中でも黃帝、顓頊、帝嚳については聊か事情を異にする。漢の武帝の頃にはすでに多くの學者は五帝を稱してはゐた、（其性質からみて、司馬遷のいふ様に尙しき以前からとは思はれないにしても）、而して又當時見在の五帝德及び帝繫も孔子の所傳と稱せられてはゐた。けれどもこれらの書の内容が果して孔子直傳のものなりや否やについては、當時にあつてすら可なり疑問視せられてゐたのであつて、儒者の中にも之を正繼にあらずとして傳へ學ばざるものありしことは、司馬遷自身（五帝本紀の「太史公曰」）及び史記索隱のいふ通りである。況んやそれは詩書と同等に論ぜらるべきものでは固よりなかつた。故に

歐陽修も此の點を指摘して、孔子修書以堯舜爲限斷、而子長上述黃帝と難じてゐる。述べて作らざるを標榜する遷（太史公自序參照）が、五帝本紀を作るに當つて一言辯ぜざるを得なかつた所以である。

因に遷がその太史公自序の中に

於是乎述陶唐（堯）以來至于麟止。自黃帝始。

とのべてゐるのが、始め私にはどうも腑に落ちなかつた。黃帝より始めるものなら何故に流黃帝以來……と言はなないのであるか。陶唐より以來と言つておきながら、すぐ下に黃帝より始むといふのはどういふ文意なのであるかと。然しこれは一旦上述のように解釋してみると極めて容易に分ることであつた。即ち陶唐以來を述ぶといふのは尙書を祖述するの意である。が黃帝以下の三帝を記すことが果して「述」であるや、この懸念はおそらく太史公自身充分感ずる所でなければならなかつた。故に此の部分を「述」の外へ出したのである。一見不審な一句の中にも遷の細心の注意が拂はれてゐるのを見る。

今その辯辭を要約すると、四方に歴遊して土地の長老らの黃帝堯舜を稱するの所に至るに、その風教固に他と異なるものがある、その遺徳の盛なるを目のあたり見るによれば、五帝徳、帝繫のいふ所是なるに近い、なほ春秋國語の中にも之れを發明する所明かなるものがある、仍つて思ふに或は尙書殘缺せるならん。甚だ苦しい辯辭である。その殘缺せる部分が他の書例へば五帝徳などに片鱗を残してゐるのだといふのであるが、左様な形迹は實際には無く、又五帝の說などは恐らくは戰國中期以後のものであるから、さうなものが尙書の中にあつたといふことは想像も出来ないものである。

然らば司馬遷は何故にか様な辯辭を費してまで、三帝を取入れて五帝本紀を作つたのであらうか。何故に尙書によつて直に堯舜から始めなかつたのであらうか。或は流行の五行思想に従つたのであらうとせら

れるかも知れないが、司馬遷の人物を知る時には、この様な考への當らざることが分るであらう。彼が寧ろ當時の迷信を白眼してゐたことは封禪書を通じても知ることが出来るし、又彼が時流に阿つてその信條を曲げるような人物でなかつたことは、太史公自序や諸列傳の太史公曰や殊に季陵禍事件等を通じて最も明かである。而してそれが單なる好奇や術氣に出づるものにあらざることが更にいふまでもない。

惟ふにその理由は、五帝本紀よりも三代世表の方に明白なすがたをとつて現れてゐるようである。

| 夏  |              | 五帝 |              |           |           |            |             | 帝王世 |
|----|--------------|----|--------------|-----------|-----------|------------|-------------|-----|
| 省略 | 以下夏殷<br>周の帝系 | 帝禹 | 帝舜           | 帝堯        | 帝皐        | 帝顓頊        | 黃帝          | 國號  |
|    |              |    |              |           |           | 顓頊一<br>昌意生 | 黃帝生三<br>昌意一 | 顓頊屬 |
|    |              |    |              |           | 帝傳<br>鯀極生 | 玄囂生        | 黃帝生<br>玄囂   | 嚳屬  |
|    |              |    |              | 帝堯<br>高辛生 | 高辛<br>鯀極生 | 中略         | 黃帝生<br>玄囂   | 堯屬  |
|    |              |    | 華、是爲<br>三帝舜一 | 略         | 略         | 一中         | 黃帝生<br>昌意   | 舜屬  |
|    | 文命是<br>爲禹    | 命  | 鯀生文          | 略         | 略         | 一中         | 黃帝生<br>昌意   | 夏屬  |
|    |              |    |              | 祖<br>高辛生  | 高辛<br>契   | 中略         | 黃帝生<br>玄囂   | 殷屬  |
|    |              |    |              | 后稷<br>周祖爲 | 高辛生<br>后稷 | 中略         | 黃帝生<br>玄囂   | 周屬  |

一見して五帝三代の世系がすべて黃帝に發するのを認め得る。即ち最上段には帝系を掲げ、下の各段にはその帝系の由つて來る所を示してをり、帝系の發するところ、流別の下るところ、本支の系統は一目瞭然たる形に於て提示せられてゐる。若しこれが堯舜から始まつてゐるとすれば、夏殷周三代（及び秦）の歸する所がない。<sup>（註）</sup>史記は裝束して冠せざるものゝ如き形であつたであらう。資料は勿論存在してゐたのであるが、問題は之を整理統一して本紀の先頭に置き、世表に編んで整然たる系圖として提示したる意圖に存するのである。この様な企ては史記以前には固より無かつたし、史記以後にも斷代史たる正史には之を見ない。私は五帝本紀及び三代世表に示されたる意圖は、司馬遷個人のものではなくして、寧ろ時代の要求であつたと思ふ。

（註） 殷周秦の各始祖が直接堯舜に結合せられずして顓頊帝嚳に結合せられた理由は別に考察せらるべき問題である。此の表には秦の始祖は出てゐないが、秦本紀をみるとそれはやはり顓頊から出たことになつてゐる。

然らば史記の當面した時代の要求とは如何なるものであらうか。それは五帝本紀及び三代世表自體が語つてゐるように、中國帝權の發祥を語ると同時に古史の出發を明かにし、更に諸族統一の機運に棹するものであつた。反面から言へば、中國古代史に對する認識を整理し確立し、現代的な統一を與へんとする欲求であつた。世傳の整理といふことはすでに司馬遷の意圖するところであつた（太史公自序參照）が、此の時代的需求は必ずしも彼の意識にはつきり上つてはゐなかつたかも知れない。その方法が今日から見ても合理的、科學的であつたか否かは問はふところでない。かゝる欲求と努力との發生こそは見のがしに

ならないものである。

一の民族が相當文化の域と状態に達すれば、その民族の發祥及び發展の歴史を闡明しやうとするのは自然的な欲求であらう。而してかゝる欲求の性質、程度等は勿論その民族文化の高度、様相に俟つものなるが故に、當然その時代の文化状態が顧られなければならない。かゝる觀點からすれば、漢の武帝時代に於ける史記の出現——その五帝本紀と三代世表との編述は、洵に現るべくして現れたものであるとの感が深し。

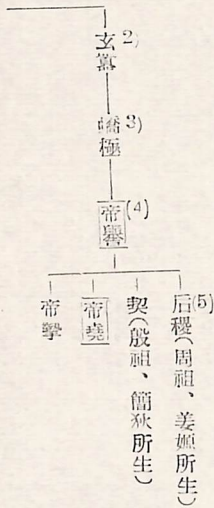
共和以來春秋、戰國の世となり、秦楚の際の爭亂を経て遂に高祖定陶に即位するに至るまで、實に六百年の春秋を分立擴張の禍亂の中に過してきたのである。長い間支那はその歴史を顧るの機會を有たなかつた。歐陽修は崇文總目に於て實錄を説明する中に、實錄起於唐世、自高祖至於武宗、其後兵盜相交、史不暇錄、といつてゐるが、唐代の中亂れたりと雖も、春秋戰國秦楚の際の各國攻伐相つぐの甚しきから見れば靜謐なりしといはねばならぬ。がそれですら猶史錄するに暇あらずといふのである。推して察すべきである。然るに漢帝國の創立によつて支那は初めて、而かも最大の版圖に於て中國としての大統一を完成した。名實共にその統一の確立を得るためにはそれから更に六十年を経るを必要としたが——五楚七國の亂が鎮定して武帝の世となつた時こそ、その名實の具るを得た時であつた。斯くて支那は今こそ支那としての歴史を顧るべき時期に遭遇したのである。

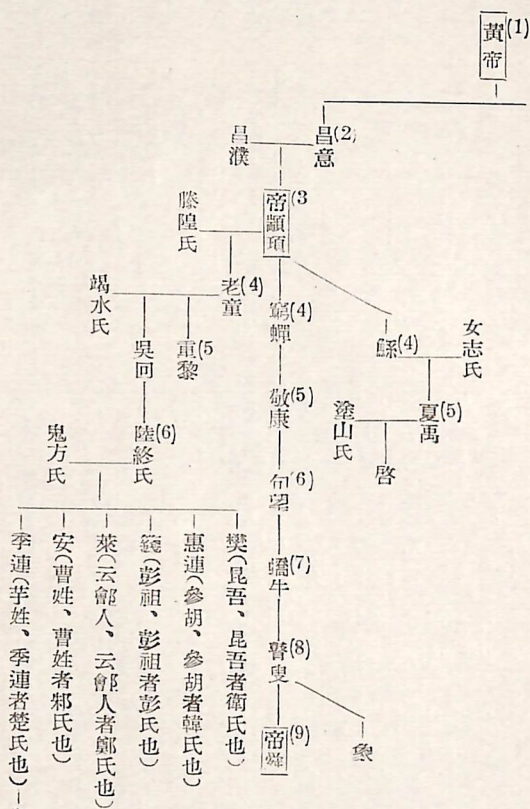
正にそれは支那としての歴史を顧るべき時期であつた。漢室の歴史としてはまだ漸く六七十年を闊した

に止まる。此の六七十年に比しては、支那は反省し、整理し、綜合統一すべきあまりに長い過去を有つてゐた。史記は——司馬遷個人の自覺はとも角も——實に此の反省と整理と綜合統一の成果であつたのである。史記が單なる漢室の歴史でなくして、苛帝を主とする五帝本紀に始まつてゐるのは當に然るべきであり、夏殷周三代、秦、及びその他の諸族が共に黃帝に歸一してゐる（同表參照）のは、形態的に中國統一を完成した當代の、内面的な欲求の現れであつたのである。但し五帝本紀及び三代世表に現れた右の意圖と欲求とは必ずしも漢帝國のそれを代表するものではなく、寧ろもつと一般的漢民族としての文化意識の現れであつたと見らるべきものである。このことについては今少し詳説すべきであるが、聊か枝論に互るので省略することとした。

(一)

史記三代世表の五帝の部分は先きに略掲したが、三代世表の根據となつた帝繫の文によつて系圖を作つてみると次の如くである。





此の系圖の中樞をなすものはいふ迄もなく五帝である。五帝についてはこゝに掲げられたものゝ外に數個の種類があり、その起原と發展とは一の研究問題であるが、その最も原始形と目されるものは孔子家語の五帝篇に載つてゐるものであらう。「天に五行あり、水火木金土なり。時を分ちて化育し、以て萬物を成す。その神をばこれを五帝と謂ふ」。即ち五帝の説は五行説から起つてきたものである。荀子の説によると五行説は子思が之を唱へ、孟軻が之に和したといふのである（非十二子篇）が、普通には孟子と同

時代の鄒衍の提唱にかゝるものだとせられてゐる。尤も之に對しては崔適の反對説の如きもある（史記探源、終始五德）が、何れにしても五行説の起原は戰國中期を遡るものではない。封禪書に現れてゐる春秋當初以來の幾多五帝に關する記述の如きは勿論後世の僞作である。五帝が五行を司り、四時方位を支配する神々であつた時分には系譜の如きものは必要でなかつた。然るにその系譜が作られるようになったといふことは、天界の神々が直接人界につながりをもつてきたといふことである。従つて五帝にも出入移動が行はれ、人界に於ける理想の帝王堯舜がこれに参加して、家語の五帝篇、禮記月令、呂氏春秋十二紀等に於ける五帝——大皞（木）、炎帝（火）、黃帝（土）、少皞（金）、顓頊（水）——から、五帝德、帝繫の五帝——黃帝、帝顓頊、帝嚳、帝堯、帝舜——への變化が行はれることによつて、右のつながりは完成したのである。（五帝説については津田博士の「漢代政治思想の一面」に敎へらるゝ所が多い）。五帝德、帝繫の作成された年時は明確ではないが、荀子、秦記に據れる秦始皇本紀、賈誼新書等により五帝の現實化されてゆく過程を辿るに、それは漢代に入つてからのものであるらしい。早く見ても始皇帝時代の上に出るものではない。（詳細な論究を此の小論では割愛することを餘儀なくされてゐる）。而してかゝるものゝ出現が單なる五帝説の發展といふ以上に、かの五帝本紀及び三代世表を生んだ時代的欲求の先行的産物であることはいふまでもないであらう。

帝繫は一の體系である。五帝の外に夏殷周の祖を包括し、諸族諸侯の始祖をさへ結合して、中國の全氏族を統合した一大體系である。が斯様な體系としての出現は秦漢の交であるとしても、體系の素材となつ

たものは決して體系つけらるゝの日に忽然として現れたものではない。その斷片的素材がどこまで選れるものであらうか。素材としての結合はどの程度に行はれてゐたであらうか。そして體系化の結果は如何て現はれてゐるであらうか。

最古の文献たる詩經及び易經には此の體系の素材と覺しきもの乏しく、たゞ詩の中に禹と后稷と契とがうたはれてゐるのみである。尙書に至つて堯舜が現れてゐるのであるが、しかも堯舜の現れる堯典及び皋陶謨の如きは、尙書中にも比較的後世の作であるといふ説は殆んど動かぬ所の如くである。堯舜は儒家に於ける理想の帝王であり、黃帝の事は書にも論語にも孟子にも出てゐないによつて見れば、それは儒家以外のものが唱へ出したものであらうと思はれる。司馬遷曰く、百家言黃帝、其文不雅馴（五帝本紀）大史公曰く。即ち百家の徒が儒家の堯舜の向ふを張つて、堯舜以上のものとして唱へ出したものであらう。然るに文獻に現はれた所では、黃帝はこゝに推定したよりも遙か以前から知られてゐる事になつてゐる。

左傳僖公廿五年の條に曰く、遇黃帝戰于阪泉之兆。

國語魯語に曰く、黃帝能成命百物、以明民共財、此の條の出てゐるのはやはり僖公の時である。而して黃帝の外に顓頊、帝嚳、堯舜ら所謂の五帝の名が出てゐるが、烈山氏、共工氏、禹なども共に出てゐつて、五帝の形はとつてゐない。

國語晉語に曰く、少典……生黃帝炎帝。これは文公の時であつて、文公は前掲魯の僖公とほぼ同時の人である。

魯の僖公廿五年といふ年は前六三五年で、孔子の出生に先立つ八十四年である。此の頃に果して黃帝その他がすでに知られてゐたがどうか、問題は左傳國語の書評といふ面倒なことになつて來るが、今はかりに百歩を譲つて既に知られてゐたとしても、戰國から秦漢にかけての頃、百家の徒によつて最高絶大な帝王として崇拜されてゐるような状態には無かつたといふことだけは、疑ふの餘地がない。

なほ左傳昭公十七年の條には、黃帝以<sub>レ</sub>雲紀云々の記事があり、黃帝の外に炎帝、共工、大皞、少皞、顓頊の名が出て居り、此の談をなした鄭子といふ者について、孔子が學ぶことになつてゐる。後世黃老の徒の作爲せる孔子説話の初期のものであらう。但し此の説話に於てもまだ五帝説は成立してゐない。

顓頊、帝嚳については異傳奇説が少くない。しかも古い所には無くて漢代以後に多いのである。世本、五帝德を始めとし、漢志、右史考（譙周）、帝王世紀（皇甫謐）、路史（羅泌）、通鑑外記（劉恕）、釋史（馬驥）等がそれらの主なるものである。然し顓頊も帝嚳も黃帝と同じく國語、左傳以前には見えず、國語左傳にも夫々二三度現れてゐるにすぎない。殊に帝の譽名は左傳に無く、たゞ高辛の名が出てゐるだけである。

前述のように左傳國語には五帝の説はまだ固定してゐないが、帝繫の素材となる系譜が生じてゐたらしい形迹がある。即ち魯語には次のように出てゐる。

有虞氏禘<sub>ニ</sub>黃帝<sub>ニ</sub>而祖<sub>ニ</sub>顓頊<sub>ニ</sub>、郊<sub>ニ</sub>堯宗舜<sub>ニ</sub>。

夏后氏禘黃帝而祖顓頊、郊鯀而宗禹。

商人禘舜而祖契、郊冥而宗湯。  
(註)

周人禘嚳而郊稷、祖文王而宗武王。

(註) 韋註は此の舜は嚳の誤ならんといふ。

類似の文が體記祭法に出てゐる。

有虞氏禘黃帝而郊嚳、祖顓頊而宗堯。

夏后氏禘黃帝而郊嚳、祖顓頊而宗禹。

殷人禘嚳而郊冥、祖契而宗湯。

周人禘嚳而郊稷、祖文王而宗武王。

以上を帝繫に照合してみに、魯語の有虞氏(舜の後)が堯を郊にし、商人が舜を禘にし、祭法に有虞氏が嚳を郊にし、堯を宗にすと云つてゐるのは、何れも帝繫に齟齬する。國語韋注が商人禘舜を禘嚳の誤なりとしてゐるのは、すでに完成固定せる帝繫などの説によりしものであらうが、若しか様に訂正するすれば、訂正するべきものは獨り禘舜のみに止まらないのである。惟ふに斯く帝繫と齟齬するものがあるのは、帝繫以前の未固定時代の状態を示すものである。後世固定の説を以て之を遡訂するは不當である。

王國維氏は「殷卜辞中所見先公先王考」(爰の條)及びその「續考」(高祖爰の條)に於て、卜辞中の爰及び翌等の字を以て爰の字なりとし、爰は即ち嚳にして、契の父たることを考證論定してゐるが、魯語及び祭法の殷(商)に關する部分だけを引用し、魯語に對してはやはり韋注を援用して舜は嚳の誤なりと

する意向を示してゐる。此の論證の爲に引用せられてゐる文献は史記索隱、史記正義であり、初學記に引用せられた帝王世紀であり、殊に山海經が甚だ重用せられてゐる。而してその旁證として契と並べる后稷が譽の子であるとの説は、すでに早く世本及び大戴記帝繫篇に出てゐると述べてゐる。然し吾々は今その帝繫を問題として取上げてゐるのである、之を以て證となすことは許されない。況んや晋唐の書を以てするをや。なほ此の點に關しては契后稷の條で觸れる筈である。

王氏は五帝説の史實性を信じ、帝繫をそのまゝ信用してゐたらしい。殷周制度論に曰く、

自五帝以來、都邑之自東方而移於西方、蓋自周始、故以族類言之、則虞夏皆顓頊後、殷周皆帝譽後、宜殷周爲親。

惟ふに史記の殷帝王世系の確實なることが卜辭によつて餘りに鮮かに立證せられたので史記が過度に信用せられ、五帝以下についても五帝本紀、三代世表がそのまゝ史實なりとせられる傾きを生じたのではなからうか。皇が父なりや、或は契なりや、更に父が果して譽なりやはまだ決して確定されたりとはいへないのである。

詩に堯舜の名が出てゐないといふことは、堯舜出現の時期を考察する上に最も注目されるものである。

郭沫若氏は、古金文中、殷周以前の帝王名にして最古のものは禹に極まり、唐堯虞舜は共に見えないといふことを指摘してゐる。「金文叢考」四三頁。

詩は三千篇以上もあつたのを、刪序して三百篇となしたといふのであるが、その削除されたものゝ中に

も堯舜をうたふものがあつたとは考へられない、之を刪序する頃には堯舜はすでに儒家の上に理想の帝王として臨んでゐたのであるから、若し詩の中に一篇でも左様なものがあつたとしたら、詩の刪序者が之を看過する筈がないからである。即ち詩の時代には堯舜傳説はまだ起つてゐなかつたか、若しくは起つてゐたとしても、詩人讃嘆の對象とならぬ程度のものであつたとせねばならぬ。なほ堯典には、放勳（堯名）乃殂落、百姓如喪考妣三載とあるが、郭沫若氏は考妣と連ね用ふることの後世なること、百姓の語も亦無かりしことを指摘して、堯典は孔門の僞託なりと斷じてゐる。

但し同氏は古三年の衷無かりしことの證として孟子滕文公上の文を引用し、以て矢張堯典の孔門僞託なることを斷じてゐるが、當時滕國でそれが行はれてゐなかつたとしても、已に孔子の時、宰予が三年の衷は長過ぎるといひ、孔子之に對して三年の衷は天下の誦義なりといつてゐるのをみれば、滕國の例を以て三年の衷古無かりしことを証するのは不當であらう。況んや滕國でも周初頃には行はれたるやも知れざるをや。

堯舜の誕生は、同時にこれにまつはる凡ての傳説の誕生であつた。抑も堯舜といふ名がすでにかゝる誕生の凡ての意味の象徴である。白虎通に曰、堯猶猶堯也、至高之貌。風俗通に曰、堯者高也、饒也、言其隆興炳炳最高明也。白虎通に曰、舜猶儻也。風俗通に曰、舜者推也、循也、言其推行道德、循堯緒也。（最後のものなど聊か附會に過ぎるが）之に對して禹の如きは、それが夏の祖であるといふ以外に、文字として如何なる意味を有するかも明かでないのである。かゝる事情はその各々にまつはる傳説のすがたの上にもよく現れてゐる。即ち禹の洪水傳説に比すれば堯舜はその徳について語られ、甚しく觀念的なものを含んでゐる。堯の徳として最初に述べられてゐるのが允恭克讓といふことである。舜も亦堯のすゝめにも拘

らず「讓于德弗嗣」のである。か様な行爲を理想と考へる思想によつて生み出された傳説であることは想像するに難くない。尤も書の禹貢に現れた禹の業績の如きはヒルト氏の研究以來一般に疑はれるようになったが、洪水傳説の原始形はもつと素朴なものであつたであらう。

因に禹は殷周の詩に於て共にうたはれてゐるが、因に於て稱へられる禹は洪水に關してよりも寧ろ后稷に先立つ神としての禹であるといふ説が、顧頡剛氏によつて唱へられてゐる。（古史辨、第一冊中篇）。

### （三）

殷祖契の誕生のことは詩の商頌玄鳥篇に出て居り、周祖后稷のことは詩の各所にうたはれてゐるが、その誕生のことは大雅生民篇に出てゐる。

商頌、天命玄鳥、降而生商、宅殷土芒芒……。

大雅、厥初生民、時維姜嫄、生民如何、克禋克祀、以弗無子、履帝武敏、歆攸介攸止、載震載夙、載生載育、時維后稷。

契と后稷との誕生についてうたへるものは詩を通じてたゞこれだけである。それは天が玄鳥に命じて商を生ましめたものであり、姜嫄も亦帝の足跡を履んで孕んだのである。（詩に於ける帝が天帝の意であることは更めていふまでもない）即ち殷周の祖は直接天若しくは上帝より出てをり、特別な父のありし何らの形迹もない。

后稷不克、上帝不臨（大雅蕩）

思文<sup>タル</sup>后稷、克配彼天（周頌清廟）

等に於ても后稷は直接天につながつてゐることを思はせ、少くとも上帝の次には后稷を最高の地位において崇敬してゐるのを見る。商頌に於ける契の誕生はあまりに簡單である。契の名さへなく、その母簡狄の名も出てゐない。司馬遷は商頌によつて契のことを序したといつてゐる（殷本紀太史公曰）が、此の商頌だけによつたのでは殆んど何も記せないであらう。それは既に原始的な形態を脱してをり、寧ろ普遍化してゐた契の誕生傳説によつて、概念的にのべたものと思はれる。商を生ましむなどと言つてゐるのもそれである。商頌は宋の代に入つてから作られたものであり、又商頌全體の性質からみて、か様な形をとつたのも自然であるかと思ふ。

宋世家の太史公曰によると、宋襄の時に大夫正考甫が商頌を作つたとあるが、これはあまりにおそ過ぎるようである。正考甫が殷存の詩を手に入れたとなすの説を以て正しとなすべきであらう。

殷本紀には、簡狄が姉妹ら三人と行きて川に浴してゐた所、玄鳥が卵を墮した、簡狄取つて之を呑み、因つて孕んで契を生んだといふことになつてゐるが、之は司馬遷の勝手な作爲ではなくして、かやうな傳説が別に行はれてゐたので、これによつて詩を布演したのであらうと思ふ。

契后稷の誕生傳説についてその母のことは語られてゐるが、父について何らいふ所のないのは、やはり原始傳説の形態を残してゐるものであらう。所謂知其母而不知其父ものである。説文に姓の字を解して、古之神聖母感天而生子、故稱天子从女从生といつてゐるが、簡狄や姜嫄はまさに此の神聖母に當るもので

あらう。卵生傳説は秦祖大費の父大業についても語られてをり、朝鮮諸王の始祖についても亦存することは周知である。又巨人の跡を踐みて孕むの傳説は包犧についても語られてをり（三皇本紀）、路史高辛紀には、……螭極取陣豐氏曰袁、履大跡而傷生譽、と譽についても亦之を傳へてゐる。包犧や帝譽は（そして恐らくは秦祖大業も）戰國以後の出現にかゝるものと思はるゝが故に、之について語られてゐる傳説も從つて既存のものの附會であるかも知れないが、契や后稷などに存するものは祖先の發祥を語る民族信仰の原始形であると考へられる。されば私は周初に於ては后稷は周の最古の祖先であつて、その上は直に上帝につながるのであり、后稷の父としての帝譽などは全く考へられてゐなかつたと推定する。況んや殷祖契の父としての譽などは尙更考へられないものである。若し王國維氏の説のように譽が契、后稷の父であり商人及び周人のよつて出づる所の帝として祀られてゐたものならば、契后稷を讃嘆する詩人が曾て一度も之に及ばないといふことはあり得べからざる理ではないか。史記志疑引く所の曹魏の博士張融が曰く、若使譽爲稷契父、帝譽、聖夫、姜嫄、正妃、詩何故但歎其母、不美其父、則知堯與稷契非兄弟、譽非堯稷契父。

然るにこゝに契后稷の傳説的出生を合理的に解釋しやうとする一聯の説がある。崔述は商考信錄に於て蘇明允の説を紹介してゐるが、要約すると、玄鳥のおとした卵を取つて之を吞むなどいふは、簡狄まさに狂氣の沙汰である。又野に出でて巨人の跡などあるを見れば驚き逃けてこそ然るべきであるのに、忻然として之を踐むなどいふは、姜嫄何ぞ自愛せざるや。司馬遷は詩の解釋を誤つたのである。毛公詩傳に、乾

鳥の降るといふは郊禋を祀るの候となし、帝武を履むといふは高辛（帝嚳）の行に従へるなりとしてゐる。史記出で、鄭康成之に従ふに及んで天下皆、聖人は人にあらず、及ぶべからずとなすに至つた。遷の聖人を誣ふるや甚しいかな、當に毛公の説に従ふべきであるといふのである。崔述は之に附言して、按ずるに詩を説くには當にその意を求むべく、その文に泥むべからずとて毛傳、蘇説に左祖してゐるのである。即ちこれは、神は人なりとなす合理的見地に立つものである。が此の解釋は果して正しいであらうか。まづ后稷の出生について帝繫を信としてゐる點で取るを得ない。即ち一方に合理化を行ひつゝ、他方に作爲的結合になる傳説を看過してゐるのである。次に乙鳥の降るといふを郊禋を祀るの候なりとなす點であるが毛傳の原文は次の通りである。

春分元鳥降、簡狄祈於郊禋而生契、故本其爲天所命、以元鳥至而生焉。

これは禮記月令の仲春の月に出てゐる説によつたものであるらしい。曰く、

是月也玄鳥至、至之日以大牢祠<sub>ニ</sub>於高媒、天子親往、后妃帥<sub>ニ</sub>九嬪<sub>一</sub>御云々。

詩傳は即ちこの高媒を祠るの説によつて簡狄契を生むの所傳を解したのである。然しこれは順序顛倒である。一定の時候に大牢を以て高媒を祀り、或は高媒に祈るといふのは、原始的な信仰のすでに或る程度に形式化した形態であつて、月令のものはそれが全く儀式となつたものである。詩傳流の解釋は、此の後世的形態のものを以て原始的信仰を合理的に説かうとするのである。契や后稷それ白體がすでに信仰的、傳説的存在である。その出生を尤もらしく説き得たとした所で、我々は到底それを史實として受取ること

は出来ないのである。寧ろ左様な民族傳承の存在したといふ事實を認むるに如くはない。従つて契についても、后稷についても、その母を帝嚳の妃なりとなす點を除けば、史記の所傳を以て正しとなすべく、所謂合理的解釋は之を斥くべきである。

詩について眺められたる契、后稷は以上の如くであるが、書に於てそれは如何に現れてゐるか。詩に於ける契、后稷は夫々獨自の出生をなしてをり、二人は固より、帝繫に於けるが如く兄弟の關係あるものではない。書に於ても、それはまだ血縁關係にはおかれてゐない。此の點は禹も亦同様である。けれども書に於ては堯舜が現れ、契后稷、禹らは共にその臣として關係づけられてゐる點で、すでにある程度の作爲的結合が行はれてゐるのを見る。堯典に曰く、

帝曰、棄、黍民阻飢、汝后稷、播時百穀。

帝曰、契、百姓不親、五品不遜、汝作司徒、敬敷五教、在寬。

同様に於て皐陶、垂、益らにも夫々官職を命じてゐる。かくて——周本紀によれば、棄は部（今陝西省武功縣五丈原の地といはる）に封ぜられ、號して后稷と稱することゝなつたと記してゐるが、黎民飢に阻むにも拘らず、その后稷として封ぜられた地が適か西僻の部なのである。契司徒を主り、垂工師を主り、益虞を主り、伯夷禮を主り、その他夫々主る所があつて成績をあげたるに比すれば、遙か僻遠の部の地に於てある契について、稷を主り、百穀時に茂る、といつてゐるのはどうも不自然である。惟ふに元來西方起原のものを中央より封ぜられて來りしものゝ如く作つた爲に、か様なそぐはない部面を残してゐるのである。

なほ周紀では母姜嫄を有邰氏の女なりと言つてゐるが、之は姜嫄を嚳の妃となす場合に言はねばならなくなることで、邰の地にあつてはその必要がない。詩に之を言はないのは當然である。又、書によれば、棄は黎民の飢を救ふ爲に后稷を命ぜられてゐるのであるが、詩に於ける后稷は生れながらの後稷であつて稼穡の權化であり、稷官としての性質は少しも有つてゐない。同様の觀察はおそらく契に對しても下されると思ふのであるが、詩には契について、たゞ玄鳥によつて生れたことだけしかのせてゐないので、かゝる比較をなすことが出来ない。但し契は元來中原の出身であるから、比較が出来たとしても、西方の後稷について見たような矛盾は無かつたであらう。

書に於ける右の君臣關係は、帝繫に於ては遂に血縁關係によつてつながれ、后稷、契、堯らは共に帝嚳の子として兄弟となり、これらと顓頊の孫となつた禹とはふた徒兄弟の關係におかれるに至つた。舜は同じく顓頊の子孫とせられたが、前數者らに比べると一人とび離れて四代も後となつてゐる。それだけに他の四帝に比して帝舜にはその系譜に異傳が残つてゐる。

右の人々を親戚關係におく事は自ら種々の矛盾撞着を惹起することになつた。例へば堯は己れの業績を繼ぐべき人物を探し求めてゐながら、己れの兄に契、后稷の如き傑物あるを知らず、堯の諸臣亦之を知らずにゐるといふようなことになる。又若し后稷が果して帝嚳の元妃の子であるならば、帝嚳は百五歳で崩じたといふから、その時后稷は少くとも五十歳にはなつてゐやう。その後嚳を嗣いで立つた摯の在位が九年次の堯の百歳を経て舜の世となつた時は、稷は百六十歳となつてゐる筈である。契は帝嚳の次妃の子であ

るといふが、やはり此の時百五十歳位にはなつてゐる勘定になる。果して此の理があらうや。書には載つて居らず、帝繫にも亦言はない所であるが、左傳には顓頊の才子八人即ち八愷、帝馨の才子八人即ち八元のあることを記してをり、史記の五帝本紀（虞舜の條）亦おそらくは之に據つて八愷八元の事をのべてゐる。この十六族の者は世々其の美を濟し、その名を隕さずして堯に至つたが、堯之を舉げ用ふることに能はず、舜に至つて之を用ひたといふのであるが、八元が馨の子であるとすればまた堯の兄弟であることになり、顓頊の子なる八愷は從父であることになる。然らばやはり兄弟や伯父に多數の才物あるを知らなかつた、或は登用し得なかつたといふことになる。聰明なる堯としては似つかはしくない。且つ顓頊、帝馨の子として世々其の美を濟してに堯至つたといふ八愷、八元が、やはり帝馨の子なる堯と兄弟である如きは撞着の最も甚しきものである。史記に於けるが様な矛盾撞着の點を指摘したものは少くないが、五帝の條に關しては梁玉繩の史記志疑卷一、崔述の唐虞考信錄などはその代表的なものであらう、がもと／＼血縁關係は後世になつてつけたのであるから、堯がすぐれた兄弟や叔父などを少しも知らなかつたといふようなことは、少しも不思議ではないのである。

#### （四）

次に禹、契、后稷らを夫々系譜に従つて少しく下つた所から顧みて見よう。禹は一朝の創立者といふことになつてゐるが、それは殷湯、周武らとはよほど違つた立場にある。即ち後者の史實性は殆んど疑ふべからざるものであるに對し、禹は傳說的雰圍氣の中に包まれてをり、同じく傳說的存在たる契や后稷以上

ではないのである。殷にも周にも先公といふものがある。即ち殷にありては成湯以前契に至る部分、周にありては武王以前后稷に至るまでの祖先である。尤も此先公の部分には史實的に甚だ疑はしいものを含むのであるが、とも角殷周にはそれがある。少くとも一朝開創者として此の先公を有するのは當然のことではない。然るに禹を以て第一世とする夏朝には此の先公と稱すべきものがないのである。前掲國語魯語及び禮記祭法には夏后氏の祭主として黃帝、顓頊、鯀、禹をあげてゐるが、此の四人は帝繫にあげられてゐる夏の系譜の殆んど凡てなのである。而かも黃帝、顓頊は五帝のメンバーであつて後世の附加にかゝり、固より夏に固有の先公ではない。すると禹の父としての鯀があるだけとなる（鯀は書に出づ）が、此の鯀は器量人禹の父としては似つかはしくない。魯語及び祭法に之を夏后氏の郊祭の主としてあげてゐるのは、夏の先公に全く人が無いから已むなく挙げたものであらう。開國第一世の帝王が傳說的雰圍氣に包まれてゐるといふこと、及びそれが全く先公を有たないといふこと、此の二點から私は夏朝第一世としての禹の史實性を疑ふものである。若し契や后稷を開朝の第一世とすれば、丁度右の二つの疑點を具へることになるであらう。

夏本紀の禹の條には、書の禹貢、益稷、皋陶謨等によつた龐大な記事があるが、二世啓以下には殆んど記事無く、僅かに甘誓による啓の<sup>(註)</sup>記事と、左傳による孔甲失龍の記事があるのみである。何しろ夏に關する眞の文献は殆んど無く、考古學上から提供される材料も全く無いので、深く考察を進めることは不可能である。

(註)

此の記事も墨子明鬼篇、說苑政理篇には禹のこととして傳へてゐる。

夏末と殷末との事件が不思議な程類似してゐることは竹書紀年について見られるであらう。夏史考察に對する一のヒントを提供するものである。

舜より司徒を命ぜられた契、后稷を命ぜられた棄が夏禹に事へたか否かは書には明かでないが、夏本紀によれば、舜の崩後天下の諸侯皆舜の子商均を去つて禹に朝し、禹こゝに天子の位に即いて南面して天下を朝せしむとあり、益、皋陶らも用ひられてゐるによつてみれば、契、稷若しくはその後もやはり禹に臣事したものと見なければならぬまい。然るに殷本紀によるに、契の次の照明より成湯の前の主祭に至る十三世(即ち殷先公)の間は夏との間に何ら交渉あるを見ず。<sup>(註)</sup>たゞその世系があげられてゐるのみである。而して湯に至つて夏桀と對抗關係に於て相見えることになつてゐるのである。

(註)

但し竹書紀年には夏の部分に商侯又は殷侯の名が數度現はれてゐる。そして又王國維氏の研究によつて、史記所載の殷先公は大部分卜辭中に存在することが明かにされた。(殷先公先王考)所が王氏の研究の結果によつてみると、卜辭に見える殷先公は却つて實在したものではないことを暗示してゐるのである。殷先公の性質については別に考察すべきであるがこゝに詳説するを得ない。竹書の古い所はたゞ傳説を年時にはめ込んでゐるものである。

又周本紀についてみると、后稷の子不窋が失官して戎狄の間に奔つたので、こゝに周は夏と絶縁することとなり、その後國を建てた殷朝との間にも何ら交渉あるを見ず、殷末西伯の起るに及んでこゝに改めて殷紂との抗争關係に於て相對することとなるのである。后稷より文王に至るまでには夏殷を合して一千年に近い年數が經つてゐる。年數の差はあるが、殷の夏に對する關係と、周の夏殷に對する關係との様相は

全く同一である。

秦のことは帝繫に出て居らず、従つて三代世表にも載つてゐないが、秦本紀についてみるとその祖以來の事情が亦殷周のそれと極めて類似してゐることを知る。即ち秦祖<sup>(註)</sup>栢翳は契、稷らと共に舜禹に事へてゐるが、その後夏殷を通じて周初に至る間殆んど記事がなく、たゞ系譜があるのみである。否その中間に殷の湯に事へた費昌、及び太戊に事へた中衍といふ者のことが出てをて、殷周の方の先公が時の王朝と何ら交渉無きに比して、その系譜の眞實らしさを語るものゝ如くであるが、然し一千年の長年月の間にたつた一二のさうな事蹟が如何にして傳はり得たか、却つて疑はしい。否所傳の如何よりも、その交渉の仕方が疑問である。西埵の地に周よりも更に後に起つた秦人が、周初以前五百年（費昌の場合）、若しくは四百年（中衍の場合）の頃、すでに中原の地に於て殷に事へてゐたといふことは、餘程有力な證據でも示されない限りは到底信じられないのである。

（註）栢翳は書に於ける伯益。これについては鑿否兩論があるが、同一人とみる方が有力である。

以上の考察から推定されることは、三代及び秦の祖だけを皆遡上せしめて五帝と結合してゐるといふことである。その爲に、遠い始祖のことだけが詳細に記述されてゐながら、その後は夫々の國を起す直前に至るまで、殆んど或は全く空隙に残されてをり、たゞ系譜があるのみといふことになつたのである。所がその系譜も始祖を遠く遡上せしめた爲に、先公の部分が甚だ稀薄とならざるを得ない。

夏の創朝者禹は直接五帝につながつてゐるから先公をもたず、従つてこゝには先公稀薄の事情もない。

殷の先公については先きの注に少しく言及したが、その史實性は疑はしいとしても、夏朝四百餘年をほゞ埋むるに足るだけの先公數はある。夏朝に直につゞく殷としてはさもありぬべしとも思はれやうが、然しその先公の部分に甲、乙、丙、丁、壬、癸といふような十干の順序さながらの名の者が續き、これにふさはしくその系譜も全部直系相續となつてゐるのはどういふわけであるか。惟ふに先公稀薄性の殷朝獨特な現れに外らないのである。

(註) 1 史記三代世表に於ける殷の先公微、緡丁、報乙、緡丙が實は上甲、報乙、報丙、報丁であることは王國維氏の研究によつて立證せられた。

(註) 2 殷が成湯以後兄弟相續を以て常制とすることは、早周知のことであるが、先公時代の直系相續制から、成湯に至つてこの社會制度を急變したとは考へ難い。

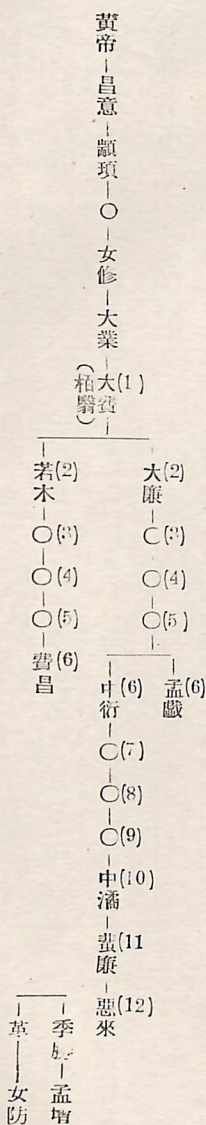
周の先公は殷のそれより更に稀薄で疑問を包藏する。後代の王朝になる程その始祖を遠く遡上せしめたことになるのであるから、さうなるのは當然の理である。殷の先公は十四代といふ事になつてゐるが、一代三十年とみて四百二十年である。(此の年數は標準年表による夏朝の年數四百三十九年にほゞ該當する)。所が周の先公は此の四百二十年に更に殷朝の五百十年を加へた九百三十年に亘る間のものなのである。西方戎狄の地に起つた周に、后稷以來の長年月の間の先公が傳へられたといふことは一寸考へられまい。宜なるかな、周本紀及び三代世表の示す所によれば、后稷より武王に至るまでに僅に十六代しかないのである。尤も史記の周先公には多少の誤脱があるらしいのであるが、探り得る限りの資料で此の誤脱を埋めてもなほ、到底后稷以來一千年に近い年月を充すことは出来ない。出来ないのが此の場合には至當であつて、

若し幾多先公の名前が出て來たとしたら、却つてそれは怪しいものでなければならぬ。

(註) 湯より紂に至るまでは三十世であるが、兄弟相繼が行はれてゐるのでセネレーションとしては十七といふことになる。五百年は一代三十年として十七代間の年數である。標準年表では殷朝の年數六百四十四年となつてゐるが此の計算では一代三十八年となり、少し長過ぎる。孟子に「由湯至於文王五百有餘歲」とあるを以て眞に近しとなすべきであらう。

所が周の先公數の少いことを誤なりとして指摘した權威ある先儒の説が少くないのである。(例へば洪邁の容齋隨筆、徐位山の竹書紀年統箋、梁玉繩の史記志疑等)みな其亦誤矣とか、其誰信之とか、史記所記帝王世次最爲不可考信とか、その不合理にしてあり得べからざるものなることを指摘論證するのであるが、前述來のように寧ろ少いのが至富であるとすれば、その誤脱を論ずるのは無意味であらう。なせ少いことにならねばならなかつたかを考究するに如くはない。

先公の錯誤、稀薄性は秦に至つて更に甚しい。今秦本紀に従つてその系譜を表示すると次の如くである。



最後の孟增は周の二世成王に事へてをり、女防以下は秦室の宗流をなすものであつて、秦記はこのあた

りから周室のそれと共にほぼ正確となつて来る。所がこのあたりまで来るまでの状態についてみるに、始祖栢翳（大費）から數へて第六代に當る費昌は、殷王第一世湯に事へてその御となつてゐるのに對し、同じく第六代の中衍は殷王九世（第五代に當る）太戊の御となつてゐるのである。その後中衍の子孫は世々殷國を佐けたとあるが、その中衍から數へて六代目の蜚廉、七代目の惡來の父子は、中衍に事へた太戊から數へて二十二世（十三代目）に當る殷紂に事へてゐるのである。更に別の側からみると、成湯に事へた費昌から紂に事へた惡來に至るまでは七代であるのに對し、成湯から紂に至るまでは十七代となつてゐる。中衍から惡來に至るまでは同じく七代であるが、中衍の事へた太戊から數ふるも紂に至るまではなほ十三代であるのである。更に系譜全體の上から見ると、始祖栢翳は顓頊の玄孫に當り、黃帝より數へて五代に當る契、后稷らより二代後れてゐるだけであるが、その栢翳より惡來に至るまでは僅か十二代であるのに對し、殷の方についてみると契より殷紂に至るまでは實に三十一代（帝王だけについてみるも十七代）あるのである。卜辭の研究によつて殷帝王の世系の確實なることが明かとなつた今日では、殷系譜と秦先公のそれとの右の如き齟齬は、凡て秦の側に誤ありと言はなければならぬ。

周祖后稷の子不窋が失官して戎狄の地に犇つたといふ記述は、彼が中央にあつて稷官に就いてゐたといふ事を指定するものゝ如くであるが、これは后稷が封ぜられて西僻邠の地に居つたことと撞著する。その戎狄の地に犇れりといふは、后稷が邠に封ぜられた件と共に、周の先が元來西戎の地に起れるものなることを語るに落ちたものである。殷祖契はもと／＼中原の地に人となつたものであるが、か様に全然その發

祥地を異にし種族を異にするものが、帝嚳に於ては等しく帝嚳の子として兄弟の關係におかれてゐる。この關係をつける爲に、有邰氏姜嫄は周初以前一千數百年の頃、遙々西戎の地から帝嚳の妃として嫁したことにせられてゐるのである。<sup>(註)</sup>有緄氏簡狄が嚳の妃とせられるには、地理的には大した不都合はなかつたやうである。

(註) 有緄氏については殷本紀正義に曰く、按記云、桀敗於有緄之墟、有緄當在蒲州。即ち蒲姑商奄と稱される殷商の故地なり。

## 結語

以上夏殷周三代及び秦の祖を五帝に結合するに當つて、直接堯舜から系統を引くように關係つけることは、當時すでに存在してゐた尙書の手前出来なかつたであらう。そこで系譜上の作爲的附加はすべて帝嚳と顓頊との上に集つた。此の事は前掲帝嚳の圖表についてみれば明かであらう。帝嚳には出てゐないが、顓頊、帝嚳にそれ／＼八才子のあることが古傳に出で、秦記によつて秦祖が顓頊に附加されたことは前述の通りである。顓頊にはなほ楚を始め多くの諸氏族が結合せられてゐるが、その祖が契稷栢翳らと同じ様に甚しく遡上せしめられてゐることは次の一例によつても窺はれやう。即ち邾公鉉鐘の銘文に「陸繹之孫邾公鉉」とあり、この陸繹なるものが實は陸終ならんといふことが王國維氏(觀堂集林卷十八、邾公鐘跋)及び郭沫若氏(金文叢考「金文所無考」)によつて發表されたが、今此の陸終なるものを帝嚳によつてみると黃帝六代の孫に當つてをり、帝堯や夏禹より一代後れてゐるに止まる。即ち夏殷以前の人間といふこと

になつてゐるのであるが、その孫の邾公の鑄た鉦鐘などといふものが存在する筈はあり得ない。しかも鉦は事實存在してゐるのである。これ即ち春秋の頃祖父と言はれてゐたものを、帝繫、世本などは堯舜時代へ持つて行つたのである。

かくて帝繫、顓頊の上に更に黃帝がおかれ、中國の諸王諸族は總て黃帝から出るといふような一大體系が結構せられた。而して此の統一形態が支那統一の爲に後世長く利用せられてゐることは、桑原博士の論ぜられた通りである。（「支那の革命」東洋史說苑所收）。さうしてこの一大體系の完成は、最初に述べた通り早くとも秦漢の交を遡るものではないと考へるものである。